

## メッセージアウトライン マタイの福音書9：18～26 「二人の娘のいやし」

[18]「イエスがこれらのことを話しておられると、見よ、一人の会堂司が来てひれ伏し、『私の娘が今、死にました。でも、おいでになって娘の上に手を置いてやってください。そうすれば娘は生き返ります』と言った」

「会堂司」とはユダヤ教の会堂の責任役員とも言うべき存在で、一つの会堂で一人が長老たちの中から選ばれた。その職務は、礼拝のプログラムを立て、説教者や朗読者を選定し、礼拝儀式が正しく行われるように監督し、建物の管理、会堂の実務を担い、運営していくことであった。それゆえユダヤ教の中心部にいるこのような人物がイエスを頼ってやって来たのはよほど困ったからであろう。この事件についてはこのマタイの福音書に記されていることは非常に簡潔であるので他の福音書の並行箇所を参考にする必要がある。

→マルコ5:22~23及び35節

「すると、会堂司の一人でヤイロという人が来て、イエスを見るとその足もとにひれ伏して、こう懇願した。『私の小さい娘が死にかけています。娘が救われて生きられるように、どうかおいでになって、娘の上に手を置いてやってください。』」(22-23)

「イエスがまだ話しておられるとき、会堂司の家から人々が来て言った。『お嬢さんは亡くなりました。これ以上、先生を煩わすことがあるでしょうか。』」(35)

ここでこの会堂司の名前は「ヤイロ」という人であることがわかる。彼は娘が死にそうなのでイエスのところに来て治していただくように頼んだのであるが、その後から来た人々が彼の娘の死を告げたのであった。

この福音書の記者マタイは8:5~13節の百人隊長の願いの時にしたように、時間的に差があることを簡単に縮めて一つの文にしている。それゆえこのヤイロという人は死人を生き返らせる力がイエスにあるということを初めから信じてやってきたわけではなかった。このヤイロとその娘のことについては時間的に後ほど見ていきたい。

[19-22]「そこでイエスは立ち上がり、彼について行かれた。弟子たちも従った。すると見よ。十二年の間長血をわずらっている女の人が、イエスのうしろから近づいて、その衣の房に触れた。『この方の衣に触れさえすれば、私は救われる』と心のうちで考えたからである。イエスは振り向いて、彼女を

見て言われた。『娘よ、しっかりしなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。』すると、その時から彼女は癒やされた」

会堂管理者ヤイロの熱心な願いによってイエスは彼の家に行くことになり、弟子たちも従った。ところがその道中で一つの事件が持ち上がった。この時、イエスについて行ったのは弟子たちだけではない。イエスの周りにはいつも多くの人々が詰めかけていた。それゆえこの時もイエスや弟子たちの周りには多くの人々が幾重にも取り囲みながらついて行ったのである。そしてそのような状況の中で一人の女がイエスの着物の房に触った。

彼女は「長血」という病になっていた。この病は正確にはどのようなものか不明であるが体のどこかが傷ついた場合、出血が止まらなくなる病気であり、今日の血友病のようなものではないかと思われる。マルコ5:26を見ると「彼女は多くの医者からひどい目にあわされて、持っている物をすべて使い果たしたが、何のかいもなく、むしろもっと悪くなっていた」と書かれている。このような状態が十二年も続いていたのである。これは今から約二千年も前の話であるので、医者と言っても今日のような医者と違い魔術師や占い師のようなものであったかもしれない。もう一つ彼女にとって不幸なことは彼女が社会的、宗教的に疎外されていることであった。レビ記15:19~30に書かれている律法によれば、体から血が漏出している期間は女性は宗教的に汚れた者とみなされ、彼女の寝床も、座った物も汚れたものとされ、これに触れる者も夕方まで汚れた者とされた。それが十二年間も続いたということは、彼女がその間一切の社会生活と宗教生活から締め出されて、事実上死んでいるのと何ら変わりのない状態であったことを意味している。

それゆえこの女性が21節で「この方の衣に触れさえすれば、私は救われる」と心のうちで考えたことは精神的、肉体的にも社会的、宗教的にも元どおりにカムバックできる、丸ごと救われるという意味があったのである。「衣の房」とはユダヤ人が主の命令を思い起こして守るために衣の四隅につけた房のこと。→民数記15:37~39 イエスもその教えを守られたが、パリサイ人たちはそれが目立つように衣の房を長くしていた。→マタイ23:5

彼女は人前に出られない不浄の身であったために、衣に触れるという形でしかその願いをかなえることができないと思ったのである。これは触れば治るという迷信や妄信ではなく、不浄の身だからという悲しいあきらめがこのような形をとらせただけであって、彼女の信仰の内容は、すべてのことがイエスによって解決されると期待した実に見上げた内容であった。イエスの周りには群衆が詰めかけていたので、イエスの衣に触れる者たちも他にもいたであろう。しかし、信仰をもってイエスに触れたのは彼女だけであった。

しかしながらこの女性には病を癒されたら、こっそり立ち去ろうとする弱

さがあった。

このことについては並行箇所の子ルカの福音書8:45~48を参照したい。→

「イエスは、『私にさわったのはだれですか』と言われた。みな自分ではないと言ったので、ペテロは、『先生。大勢の人たちが、あなたを囲んで押し合っています』と言った。しかし、イエスは言われた。『だれかがわたしにさわりました。わたし自身、自分から力が出て行くのを感じました。』彼女は隠しきれないと知って、震えながら進み出て御前にひれ伏し、イエスにさわった理由と、ただちに癒やされた次第を、すべての民の前で話した。イエスは彼女に言われた。『娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。』」

公衆の面前でイエスがこのようにされたのには理由がある。

もしそのまま彼女が黙って立ち去り、その後、病が治ったことを周囲に告げ、普通の生活に立ち返ろうとしても誰も信ぜず、受け入れてくれないであろう。ことに女性の長血という原因不明の病についてはそうである。それゆえイエスはこのように公衆の面前でこの女性が治ったことを彼女の口を通して証しさせ、今後の彼女が宗教的、社会的生活に復帰できるようにと配慮されたのである。彼女は信仰をもってイエスに触れた。そしてその信仰のごとくに癒されたのである。

[23-26]「イエスは会堂司の家に着き、笛吹く者たちや騒いでいる群衆を見て、『出て行きなさい。その少女は死んだのではなく、眠っているのです』と言われた。人々はイエスをあざ笑った。群衆が外に出されると、イエスは中に入り、少女の手を取られた。すると少女は起き上がった。この話はその地方全体に広まった」

マルコ5:35によると、イエスが長血の女の癒しの件で時間を取っているうちに、会堂司の家から人々が来て、「お嬢さんは亡くなりました。これ以上、先生を煩わすことがあるでしょうか」と告げた。

この件に関してもマルコの福音書のほうが詳しいので、続いてマルコ5:36~43まで参照したい。→「イエスはその話をそばで聞き、会堂司に言われた。

『恐れなくて、ただ信じていなさい。』イエスは、ペテロとヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネのほかは、だれも自分と一緒に行くのをお許しにならなかった。彼らは会堂司の家に着いた。イエスは、人々が取り乱して、大声で泣いたりわめいたりしているのを見て、中に入って、彼らにこう言われた。『どうして取り乱したり、泣いたりしているのですか。その子は死んだものではありません。眠っているのです。』人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスは皆を外に出し、子どもの父と母と、ご自分の供の者たちだけを連れて、その

子のいるところに入って行かれた。そして、子どもの手を取って言われた。『タリタ、クム。』訳すと、『少女よ、あなたに言う。起きなさい』という意味である。すると、少女はすぐに起き上がり、歩き始めた。彼女は十二歳であった。それを見るや、人々は口もきけないほどに驚いた。イエスは、このことをだれにも知らせないようにと厳しくお命じになり、また、少女に食べ物を与えるように言われた」

ユダヤでは葬儀の時には最低二人の笛吹きと一人の泣き女を用意することになっていた。ヤイロの家には、その地位にふさわしく何人もの笛吹く者や泣き女が集められ、さらに親族、関係者たちも集まり、騒然としていたのである。イエスは彼女は眠っていると言われたが、これは彼女が死んだ状態からイエスご自身によってよみがえらされるので、一時的な眠りに過ぎないという意味。「タリタ、クム」とはアラム語で、当時メソポタミアやイスラエルの北部ガリラヤ地方では広く使われていたことばでセム語の範疇にあり、ヘブル語とは約80パーセントの割合で共通していた。イエスはガリラヤのナザレで育たれたので、アラム語も日常的に使っておられたであろう。ここでイエスがあえて「タリタ、クム」とアラム語で語られたことが記録されているのは首都のエルサレム出身のマルコ(使徒12:25)にとって非常に印象的であったからであろう。そして確かにイエスが少女の手を取られると彼女は起き上がり、歩き始めたのである。「眠っている」とのイエスの言葉を聞いてあざ笑っていた人々はヤイロの娘が生き返ったのを見て口もきけないほど驚いてしまった。彼女は長時間、病床に臥せっていたのであろう。イエスは彼女に食べ物を与えるように言われた。これは十分に体力を回復できるようにとの愛のある行き届いた配慮であろう。長血の女は十二年もの間その病に苦しみ、社会からも疎外されたような状態であった。ヤイロの娘は恵まれた環境の中で育ち十二年たっていた。つまりヤイロの娘が生まれた時から長血の女は病に苦しんでいたのである。それぞれのたどった時と環境は全く違うようであるが、二人がイエスに出会い(片方は自分から、片方は父親の熱心な願いから)、イエスによって病が癒されたときに、新しい歩みが始まったのである。

これは彼女たちだけでなく、私たちもイエスに出会う(救い主と知り、信じる)時、その人生が変えられ新しい生き方を始めることができるのである。→マタイ11:28~30、ヨハネ 10:10~11、詩篇23篇

旧約聖書にも預言者のエリヤやエリシャが死んだ子どもを生き返らせた例が記されている(I列王17:17~24、II列王4:32~37)が、彼らは常に神に祈り、神によって奇跡を起こしていただいたのであって、彼ら自身は神から遣わされた一人の人間であった。しかし、イエスは祈りなしに、むしろご自身の手

と権威あるみ言葉だけで死を生に変えられたのである。この方は神の使いとか預言者ではなく、まことに神ご自身なのである。このお方は私たちを罪と死と滅びから救うためにこの世に人として来てくださったのである。

「彼は私たちのわずらいを担い、私たちの病を負った」（イザヤ53:4）  
イエスは私たちの罪、死に至る病をご自身の十字架の死によって贖ってくださった。このお方を自分の救い主、癒し主と信じる者はだれでも分け隔てなく救われ、神の子とされ、永遠のいのちが与えられ、病も痛みも死もない天の御国で喜びと平安と神への賛美をもって生きることができるのである。